

年報

名古屋大学大学院人文学研究科
教育研究推進室

2021

目次

巻頭言

名古屋大学大学院人文学研究科長 周藤芳幸 i

I 教育研究推進室の活動報告 1

1. 大学院生支援事業 1

1-1 研究発表支援事業一覧 (2021年度) 1

1-2 フィールド調査プロジェクト一覧 (2021年度) 1

1-3 フィールド調査プロジェクト報告書 (2021年度)

小島秋良 「戦地再訪」作品の資料調査——戦地再訪ブームと記録をめぐって 2

松田克洋 近現代皇室による災害対応の制度史的研究
——罹災救恤金算出過程の解明とその制度変遷把握を中心に 4

馬塚智也 遠州報国隊と近代日本——国学・草莽隊の近代とその伝説化 5

高松世津子 近世戒律復興・自誓受戒の律僧関連資料寺院調査 6

2. 教育研究推進室主催の行事 (FD・ワークショップ・その他) (2021年度) 7

II 人文学研究科の教育・研究活動 8

1. 教員の著書 (単著/単独編集別) 一覧 (2021年度) 8

2. 教員の自著紹介 (氏名 ABC 順) 9

杉山美耶子 Miyako SUGIYAMA
Images and Indulgences in Early Netherlandish Painting. Turnhout: Brepols Publishers. 9

周藤芳幸編 Yoshiyuki SUTO (ed.)
Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World.
Wien: Phoibos Verlag. 10

III 各種データ 13

巻頭言

この年報は、2017年の人文学研究科の創設（旧文学研究科、旧国際言語文化研究科、国際開発研究科第3専攻の再編統合）から5年目にあたる2021年度における研究科の教育研究活動の概略について報告するものである。しかし、発行主体である教育研究推進室が旧文学研究科に設置されたのは2006年のことであり、以来、上記の組織再編に至るまで、この年報は、ギリシア語で大学院教育を意味する『メタプティヒアカ』というタイトルで刊行され、その内容も大学院教育の改革や国際化に向けた講演会やワークショップの報告が中心となっていた。たとえば、創刊号（2006年）ではスタンフォード大学古典学科における大学院教育のシステムが紹介され、第3号（2008年）には「英語で教える秘訣」、「アメリカの大学におけるFDの最前線」などの興味深い記事が掲載されている。それが、どのような経緯によって無味乾燥なただの『年報』と化したのかは詳らかにしないが、2022年度からは、研究科の組織が従来のコースに代えて学繋単位で構成されるようになり、また部局執行部の顔ぶれが一新されたことに伴い、教育研究推進室の研究科における位置づけとその活動のあり方、それを受けての『年報』の内容についても、初心に立ち戻るべく改革に着手しているところである。なかでも特筆すべきは、教育研究推進室を研究科長直属のシンクタンクとして位置づけ直したことであり、そのために従来の室長（副研究科長）に代えて、推進室の活動を主体的にとりまとめる幹事を室員の一人にお任せすることにした。2022年度は、言語文化学繋の宇都木昭教授がこの任にあたり、出身旧部局を異にする教員相互のコミュニケーションを深めるために「自己紹介の会」を毎月オンラインで開催するなど、研究科の一体感を醸成するためにご尽力をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

また、部局としては、この間大学執行部からストップがかけられていた承継教員の新規採用人事が再開された結果、2023年4月からはその第一陣として哲学分野・専門と美学美術史学分野・専門に、それぞれ国外の有力大学で学位を取得し国際的に活躍する卓越した若手研究者をお迎えする予定である。これにとどまらず、今後も引き続き学際的な展望のもと各研究分野の最先端で活躍する優れた若手を戦略的に採用していくことで、組織の研究力のさらなる強化と活性化をはかりたいと考えている。その際、この教育研究推進室がそのような若手研究者たちのエネルギーを集約し、人文学研究科のいっそうの発展の基盤となることを祈念して、巻頭のご挨拶とさせていただきます次第である。

2023年2月17日

名古屋大学大学院人文学研究科長
周藤芳幸

I 教育研究推進室の活動報告

1. 大学院生支援事業

1-1 研究発表支援事業一覧 (2021年度)

氏名 (分野・専門) 学年	発表題目 (使用言語)	研究集会の名称 開催地 (都市名・国名)	研究集会会期 (本人発表日)
2021年度は採択者無し			

1-2 フィールド調査プロジェクト一覧 (2021年度)

氏名 (分野・専門) 課程※	プロジェクト題目	調査訪問機関 (所在地)	調査月
高松世津子 (文化人類学) 後期	近世戒律復興・自誓受戒の律僧関連資料寺院調査	黄檗文化研究所 (京都府・宇治市)・西明寺 (京都市右京区)・海岸寺・萬松院・市立図書館・歴史研究センター・市内墓石碑・与良祖神社・朝鮮通信使歴史館・教育委員会・対馬新聞社 (長崎県対馬市)	4月、11月
馬塚智也 (日本史学) 前期	遠州報告隊と近代日本一国学・草莽隊の近代と伝説化	個人宅等・歴史文書館 (静岡県・磐田市)・市立中央図書館 (静岡県・浜松市)・大日本報徳社 (静岡県・掛川市)・東京大学史料編纂所 (資料取寄せ)	4～5月、 9～10月
小島秋良 (日本文化学) 後期	靖国偕行文庫における「戦地再訪」作品の資料調査	靖国偕行文庫・しょうけい館・国立国会図書館・昭和館 (千代田区)	7～9月、 12月
松田克洋 (日本史学) 前期	近現代皇室による災害対応の制度史的研究—罹災救恤金算出過程の解明とその制度変遷把握を中心に	宮内庁書陵部宮内公文書館 (千代田区)	10～11月
赤城祐輔 (言語学) 前期	アラスカユピック語の無声鼻音に関する基礎的調査	COVID-19の影響で調査を断念	/
小林 卓 (西洋史学) 前期	ミトラス教関連の文献調査並びにローマ市及び近郊 (オステティア) におけるミトラス教遺構の視察	COVID-19の影響で調査を断念	/

※本プロジェクトの採択者は、全て2年次 (当時) の学生である。

「戦地再訪」作品の資料調査——戦地再訪ブームと記録をめぐって

小島秋良 日本文化学分野・専門 博士後期課程2年

はじめに 1964年の海外渡航自由化以降、アジア・太平洋地域にある旧戦地への訪問が元兵士や遺族によって活発に行われてきた。このような戦地再訪ブームは遺骨収集や慰霊を目的としており、政府事業のほか戦友会などの団体や個人の旅行としても数多く取り組まれてきた。この再訪経験が帰国後、戦友会の行事報告や個人史の一部として、手記や回想録、日記、詩など様々な発表形態で書き残された。これらのうち本調査では書き手を元兵士に限定したものを「戦地再訪」作品とする。

再びかつての戦地を訪れることで生じる情動や現地の人々との再会は、戦争記憶の語りや継承、戦後のアジア地域との関係性を考える上でも重要である。しかし「戦地再訪」作品の大半が、自費出版や私家版であり市場に出回らなかったものも多い。本調査はこれらの作品の実態調査を行い、一般の人々による戦争の語り分析の土台作りにつなげるものである。なお、本調査は「靖国偕行文庫における「戦地再訪」作品の資料調査」として助成を受けたが、調査の過程で複数の資料館を利用したためタイトルを変更した。

調査概要 靖国偕行文庫、しょうけい館、昭和館、国会図書館に所蔵されている「戦地再訪」作品を調査した。なお、しょうけい館では学芸員の方のご協力を得て全ての図書を確認することができた。

調査結果・考察 調査期間中に確認できた218作品のうち、「戦地再訪」作品は114作品であった。再訪年代別では1970年代から増加し1980年代にピークを迎える【図1】。出版年代別に見ても1980年代が最も多く【図2】、これは自分史ブームにより自費出版が行いやすくなったことと、書き手が定年退職を迎えるなど自身の生活に一区切りつき、改めて戦争を振り返ることが可能になったためと考えられる。再訪地域別では、遺骨収集や慰霊事業の受け入れが東南アジアやオセアニアと比べて活発に行われたわけではない、中国の再訪作品も確認することができた【図3】。

「戦地再訪」作品では、再訪・出版年代の違いや、再訪地域の別にかかわらずかつての戦地で身体感覚に生じた異変の語りが共通して見られる。例えば山や戦友の顔が近づいてくる、声が聞こえるなどである。これらの現象の語りは、団体で再訪し複数人によって編集された作品では、現象を帰国後も参加者と共有、共感することを重視した書き方がされ、生者と死者だけでなく、生き残った者同士の結びつきも強化し呈示するものとなった。異変現象は慰霊の最中または直後に生じており、再訪者にとってこれらの現象から亡き戦友の存在を感じ、さらにはそれを書き残すことに意義があった。一方で、これらの現象を強調することは、現地の人々の被害を後退化してしまうことにもつながる。そこでは「喪の作業」としての戦争の語りの限界が見られるのだ。以上の考察は「「戦地再訪」作品に見る「傷」——戦地空間と身体への異変」(第55回国際研究集会「戦後日本の傷跡」2022年2月)で発表した。

また今回の調査で「戦地再訪」作品が、他の作品内でも引用、言及されている例を多数見つけた。自費出版であるため出版数が限られているにもかかわらず、「戦地再訪」作品のネットワークが存在していたと言える。すなわち書き手にとっては、同じような境遇の読者に読まれることを意識した語りを行うことになったのだ。

おわりに 「戦地再訪」作品は書き方の形式があるわけではなく、記述の多寡も作品によって異なる。そのため厳密な分類は不可能だが一つの傾向として今回の結果を示したい。また再訪経験を記録として残すだけでなく、詩や短歌、小説などの創作題材として使用している作品を発掘することができた。これらの作品分析を今後の課題としたい。

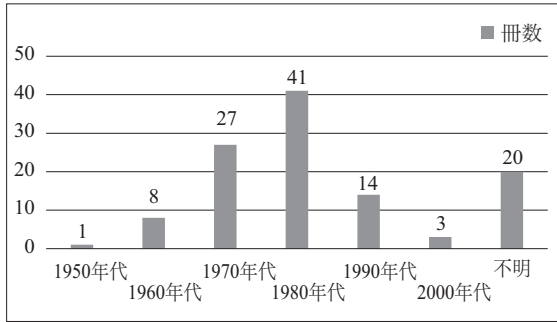


図1 再訪年代別

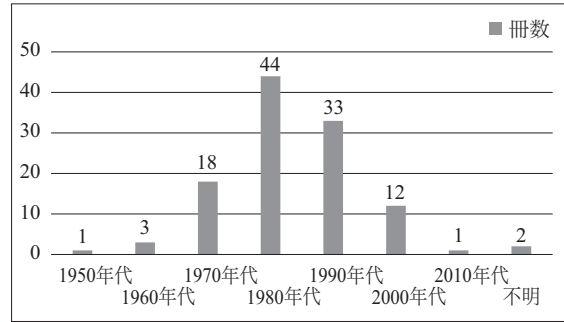


図2 出版年代別

※複数回訪問している場合は、最初に訪問した年で分類した。

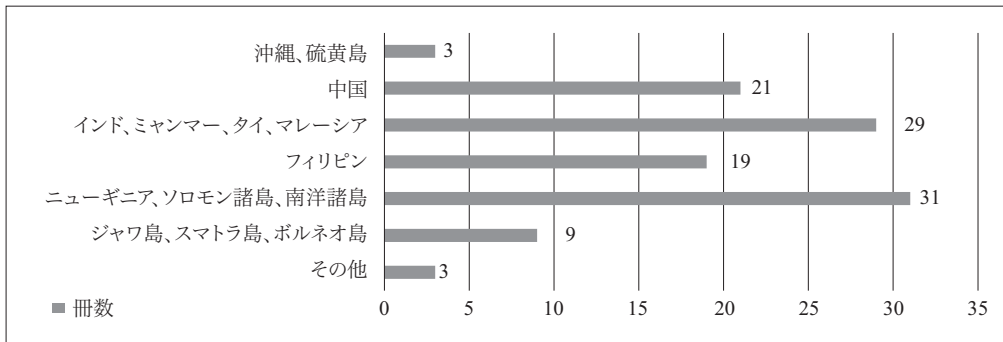


図3 再訪地域別

※複数の地域に跨る場合は、重複して集計した。

近現代皇室による災害対応の制度史的研究 ——罹災救恤金算出過程の解明とその制度変遷把握を中心に

松田克洋 日本史学分野・専門 博士前期課程2年

研究概要 近年、平成期の天皇・皇后らによる災害時の積極的な被災地訪問が国民に寄り添う天皇の在り方として高く評価される一方、関東大震災や一部の大規模災害を除くと、明治期から昭和期にかけての皇室による災害対応については明らかにされない部分も多い。明治期以来の皇室による災害対応として行われた罹災救恤金の下賜についても、先行研究においては金額の大小や下賜対象となる頻度等の“結果”側から下賜金が果たした社会的・政治的役割を分析するものがほとんどである（遠藤興一『天皇制慈悲主義の成立』（2010、学文社）など、社会福祉史・皇室制度史からの分析が行われている）。そこで報告者は、宮内省内で用いられた下賜金算出システムの形成に着目し、皇室が災害という社会的危機に際し、救恤という行為を通じてどのような対応をとってきたのかを分析することを目的とした。

調査方法 2021年10月8日、同11月4日、18日の3日間で、東京都の宮内庁書陵部宮内公文書館を訪問し史料調査を行った。調査は、下賜が行われた災害についての記録が残る「恩賜録」と、宮内省において災害関係の事務を担当した内事課の規則について記録した「例規録」の2つを中心に行った。

調査結果 宮内省下で初めて救恤金下賜が行われたのは1879年12月だが、内務省に集まった災害に関する情報が天皇に伝わるルートが作られたのは、1880年5月以降、太政官に集積された災害情報の天皇への高覧が、宮内卿によって行われるようになってからであった。また、詳細な下賜額算出方法や省庁間連携が史料に現れるのは、1884年の岡山県下暴風高潮が初めてである。この災害における算出方法は、内務省の「人命ニ関スルモノハ就諒中憫諒ニ堪ヘサルモノアリ」という意見をもとに、死者1人当たり50銭とされ、被害判明後に被害戸数と兼ね合いつつ下賜対象となる府県が決定された。この災害は同時に複数県にわたって発生した大規模災害であり、早急な対応が求められつつも、より丁寧な算出基準が必要となったと考えられる。こうして、伊藤博文の宮内卿時代に発生したこの災害を機に、内務省との協議により下賜額を算出する体制が整えられてゆく。

また、1888年の福島県磐梯山噴火以降、比較的大規模な災害においては、宮内省側に“侍従差遣による災害状況把握”を行う動きが見られる。さらに、内務省から宮内省に宛てた「相当ノ恩賜金下賜リ候様」という文言は1888年まで見られるが、1889年には無くなり、災害情報を伝達する内務省と下賜額算出を担当する宮内省とで役割が明確に分かれたと考えられる。宮内省は省内に蓄積された下賜事例を参照し、死者数や被害戸数をもとに下賜額算出を行っていたが、1898年の鹿児島県非常風害以降は、下賜額が1,000円を超えるような風水害においては1戸・1人あたりの被害内容に応じた下賜基準（死亡1円、流家1円、潰家80銭、負傷30銭、半潰家10銭、床上浸水5銭）が記された下賜算出表を用いるようになる。これは、1898年2月8日に伊藤が皇室・皇族について行った意見書のうち、「人民の請願及び救恤等に関し、公平を旨とし、慎重に処理すべきことを論ず」との指摘を受けての対応だと思われる。同様に火災・地震・ガス爆発等についても、一定基準に基づいた算出が慣例的に行われるようになった。そして、1910年の移行期を経て、1911年にはこれらの基準を増額した上で「救恤金計算率」が「例規録」に定められるに至った。なお、この年以前の「例規録」には下賜基準に関する規則は存在しなかった。以上、救恤に関して、宮内省の政治領域が段階的に画定されていく中で、罹災者間での公平性を保つ方向で下賜基準が定められてきた流れを明らかにできた。

遠州報国隊と近代日本——国学・草莽隊の近代とその伝説化

馬塚智也 日本史学分野・専門 博士前期課程2年

「草莽隊」は、幕末期に尊王攘夷運動などの政治的要求を持った在野の者たちが結集した組織である。従来の研究では、彼らは集団で要求を達成すべく行動を起こしたが、明治期に入るとそれらは否定され抹殺されていったと評価されてきた。本プロジェクトでは、慶応4（1868）年に遠州地域で結集した「草莽隊」の遠州報国隊を対象として、①幕末期の運動である「草莽隊」が維新时期以後の近代社会に与えた影響の検討、②幕末期の「草莽隊」の運動が「勤皇義団」として伝説化されていく過程の分析の2点を課題として検討し、幕末期に発生した「草莽隊」の運動について、その意義と影響を近代社会の中に位置づけ、考察を行う。本稿では、その調査・検討の結果を著す。

遠州報国隊は、明治元（1868）年末に江戸での従軍活動を終えたのち遠州地域へと戻ったが、一部の者が旧幕臣からの襲撃回避のため東京へ移住し、靖国神社の前身である東京招魂社の社司に登用されることとなった。維新政府の中心人物だった大村益次郎や木戸孝允が深く関与したこの社司登用には、東京奠都を目論む彼らが、東京招魂社設置を推進するために行うという中央側の意図も存在した。また、東京に移住した報国隊の者たちは、西洋学問を学んだり、軍を通じて中央の要人たちと接近したりして、新たな学知や機会を手にしていったと考えられる。

一方で、遠州地域に留まり続けた報国隊の者たちの動向は多様であるが、従来の研究では運動後も地域の神職・神官を務め続けた山本金木に対する指摘があるのみだった。本プロジェクトでは、敷地村（現静岡県磐田市敷地）から遠州報国隊に参加した伊藤八重喜に着目し、伊藤家の文書の調査を行った。敷地村は遠州の中部から東部に位置する地域であり、山本のいた遠州の西部地域とは異なる実態があったと思われる。伊藤家は、代々敷地村の山王社（野辺神社）の神主を務める家である。伊藤八重喜は、明治に入りしばらくは山王社の神主を務めたが、明治7年7月には敷地村の副戸長として地域行政を担う役割となる。また、彼の子である伊藤泰治も、明治7年末に役場の書記を務め始め、大正5（1916）年に敷地村村長を辞職するまで長く地域行政に関与し、伊藤家がこの地域の行政を主導していったといえる。

そのように多様な実態をもつ一方で、報国隊参加者たちは近代社会の中で相互にネットワークを築いていたと考えられる。彼らのうち特に主要なメンバーは、明治期以降も縁戚関係を通じてネットワークを展開し続けていた。そのようなネットワークの中で、書簡などのやりとりを通じ、東京移住者が持った先進的な情報が、遠州地域にも共有され、地域行政の実施に繋がっていったという流れが想定される。

そして、そのネットワークを生かして実施されたのが、報国隊に対する大規模な顕彰運動である。これは、履歴書作成（明治26年）、記念碑作成（明治40年）、表彰請願（大正2年）、記念品保存（大正9年）など繰り返し実施されている。ある特定の人物が調査などを行っているわけではなく、比較的広い範囲の地域の者たちが協同的に運動を行ったことが特徴である。顕彰運動は報国隊に参加した当事者だけでなく次世代においても実施されており、「草莽隊」の歴史が継承され、また宗良親王や賀茂真淵など、遠州地域の過去との連続性を意識した歴史観が語られたことによって、徐々に地域の精神的模範として報国隊が位置づけられることとなった。こうして、報国隊の精神面を強調する伝説的な歴史観が形成された。

以上、「草莽隊」と近代社会について、ネットワークを軸として検討を行った。課題①の検討によってネットワークの空間的な広がりについて、また課題②の検討によって時間経過に伴う継承について、それぞれ明らかにすることができた。今後は、報国隊内部の他の事例や、他の「草莽隊」の実態、そしてそれらがどのように捉えられていったのかを検討することによって、今回得られた知見を深化させていく。

近世戒律復興・自誓受戒の律僧関連資料寺院調査

高松世津子 文化人類学日本思想史分野・専門 博士後期課程3年

研究背景と課題 近世戒律復興運動は、鎌倉後期・叡尊の行った自誓受戒や戒律復興運動を学んだ真言系の俊正明忍らにより近世初頭（1602年）に始められた。そしてその後、平等心王院西明寺・大鳥山神鳳寺・青龍山野中寺の律三僧坊で近世期（野中寺では明治25年まで）自誓受戒を継続し、三僧坊の末寺も活動拠点となり戒律復興を進めた。また17世紀末までには日蓮・臨濟・曹洞・天台・浄土の各宗派に戒律復興が伝播して、それぞれにまず〔叡尊一明忍〕の自誓受戒を行う僧が現れ、その後各宗派で独自に展開した。さらに1650年代以降に大陸の仏法を伝えた黄檗僧が、各宗派律僧らとも交流し影響を及ぼし合った。先行研究については、律三僧坊の各寺院資料リストが稲城信子代表『日本における戒律伝播の研究』（2004）に掲載されており、また代表的な律僧の事績や概要については上田霊城・藤谷厚生らの研究で明らかにされた点も多い。しかし、律三僧坊資料の内容はほとんど分析されておらず、近世期仏教史研究における課題の一つだといえる。さらに、別受戒相承のために大陸渡航を目指した明忍は、渡航がかなわず対馬の地で三年後に遷化した。当時の対馬の状況や明忍の足跡、明忍墓塔の塔銘筆跡と現状確認、日蓮宗不受不施派の日奥との交流など、当地での調査が必要である。

調査の内容 当プロジェクトでは、近世前期の戒律復興の動向を明確化するために、以下を行った。

【①西明寺資料調査】明忍顕彰の中でも重要な、黄檗僧月潭道激筆とされる一連の資料、『檳尾山平等心王院故弘律始祖明忍和尚行業曲記』（1687）・『檳尾山西明寺俊正明忍律師塔銘』・『西明寺梵鐘銘』の原本、また在対馬の臨濟僧による『対州諸師和韻等』、日蓮宗草山律の深草元政撰『檳尾平等心王院弘律始祖明忍律師行業記』（1664）など、17世紀後半の他宗僧による資料を中心に写真撮影した。さらに、『明忍律祖対州塔所之図』『覚（明忍塔造建一件）』など、明忍終焉の地である対馬での墓塔建立に関わる資料の撮影も行った。

【②黄檗宗万福寺の月潭道激自筆資料調査】萬福寺黄檗文化研究所蔵の黄檗僧月潭自筆掛軸などの写真撮影と分析により、『檳尾山平等心王院故弘律始祖明忍和尚行業曲記』等と同筆であることが明確化できた。つまり、黄檗僧月潭は西明寺律僧と交流を持ち、その文才と筆跡の美しさにより依頼されて『曲記』を執筆、また西明寺梵鐘や対馬海岸寺近くに所在する明忍墓塔の、銘文と文字を担当したことを確認した。さらに、月潭による数多くの他資料も確認した。

【③対馬海岸寺と明忍律師に関わる史跡・資料調査】対馬海岸寺では、明忍位牌や歴代住職位牌を確認、また近くの中腹にある明忍墓塔を確認した。さらに対馬での足跡を辿る目的で、交流した日蓮宗不受不施派日奥の居所跡等にも行き、対馬教育委員会担当者取材、対馬市図書館での地域資料複写なども行った。

調査成果 西明寺で始められた戒律復興が、僧相互の個人的交流により伝播したというその過程を明確化できる資料等を確認・撮影できた。例えば、西明寺蔵資料と黄檗文化研究所蔵月潭自筆資料の撮影・分析により、西明寺蔵の対象資料が月潭の真筆であると確認でき、それに関する論文を関口静雄氏と共著で2021年9月に発表した。また臨濟僧を中心とする17～19世紀の明忍顕彰の動向を知る資料も撮影し、論文を2022年7月に関口氏と共著で発表した。対馬調査では、地域文献での明忍関連情報や海岸寺での聞き取り、明忍墓塔の位置と現状確認、明忍自筆書簡（以前の調査で撮影）でその交流が記される不受不施派日奥の居所の位置や足跡、現状の確認等ができた。本内容の論文（単著）は現在査読中である。

今後の課題 以上の調査成果を、博士論文において発表する。特に、対馬での明忍の思想・信条や生活、また律三僧坊や他宗派の律僧、及び黄檗僧との相互交流について明確化し、近世前期の戒律復興の伝播と事績をなるべく詳細に解明する。それにより、近世前期仏教史、さらに言えば江戸時代前期の社会における戒律復興運動の意味づけを試みたい。

2. 教育研究推進室主催の行事（FD・ワークショップ・その他）（2021年度）

年月日	発表者	題目・概要等
2021年4月10日	片山詩音・趙書心・大林侑平	日本学術振興会特別研究員応募説明会（1回目）
2022年1月13日	片山詩音・趙書心・大林侑平	日本学術振興会特別研究員応募説明会（2回目）
2022年2月21日	小島秋良・松田克洋・馬塚智也・高松世津子	フィールド調査プロジェクト報告会 (第7回教育研究推進室主催ワークショップ)

Ⅱ 人文学研究科の教育・研究活動

1. 教員の著書一覧 (2021年度)

(編) 著者	書籍名	出版社	発行年月
Sugiyama, M.	Images and Indulgences in Early Netherlandish Painting	Brepols Publishers	2021年6月
大名 力	英語の綴りのルール	研究社	2021年8月
布施 哲	世界の夜——非時間性をめぐる哲学的断章	航思社	2021年10月
木俣元一	ゴシック新論——排除されたものの考古学	名古屋大学出版会	2022年2月
石川寛編著	古文書・古絵図で読む木曾三川流域——旗本高木家文書から	風媒社	2021年4月
日比嘉高編著 飯田祐子・宮地朝子・ 榊原千鶴・近本謙介・ 塩村耕・大井田晴彦 他著	疫病と日本文学	三弥井書店	2021年7月
周藤芳幸編著	Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	Phoibos Verlag	2022年1月
近本謙介編著	ことば・ほとけ・図像の交響	勉誠出版	2022年3月

2. 教員の自著紹介

杉山美耶子 Miyako SUGIYAMA
Images and Indulgences in Early Netherlandish Painting.
 Turnhout: Brepols Publishers.

贖宥とは、すでに神の赦しを授かった罪に対し、なお課せられた有限の苦しみ(罰)が免除されることをさす。中世末期においては、とくに地上で犯した罪の償いとして死後に煉獄で過ごさなければならない時間の免除のことを意味した。贖宥システムは初期ネーデルラント絵画が隆盛した15世紀から16世紀前半にかけて飛躍的に発展し、教皇や司教らによって膨大な数の贖宥が認可された。しかし、その一部は徐々に教会関係者が利益を獲得するための手段として、高額な値段で売買されるようになった。1517年10月にマルティン・ルターが「95箇条の論題」を発表したことにより宗教改革の火蓋が切っておとされて以降、贖宥は主として金銭によってのみ「売買」可能な「商品」であり、敬虔さ・信仰とはかけ離れたものと考えられるようになっていった。そして同様の偏見は今尚残っている。しかしながら、宗教改革前夜においてとくに信者にとって重要であったのは、宗教的实践をとおして獲得する贖宥であった。すなわち、聖堂や修道院、そして聖像等に詣で、罪の贖いのためにある一定の敬虔な行為と修練を行った悔悛者たちに贖宥が授与されたのである。そしてその条件を整えるため、様々な視覚芸術作品(イメージ)が用いられた。

本書では、図像研究と史料分析を両立しつつ、絵画・彫刻・装飾写本及びインキュナブラなど、媒体を超えた様々な対象を比較分析している。第一章では、贖宥が付与された祈祷文(Salve sancta facies, Ave sanctissima Maria mater dei, O domine Jesu Christe adoro te)と、それらの対となるイメージ、すなわち「聖顔」、「太陽の聖母」、「聖グレゴリウスのミサ」の図像と機能の分析を行った。これらの祈祷と図像、或いはテキストとイメージの関係は、装飾写本においては明瞭だが、テキストを有さない板絵(祈念画)も贖宥獲得のために用いられた可能性を提示した。第二章では、ローマとエルサレムへの霊的巡礼を通して獲得できる贖宥と、霊的巡礼の実施のために使用された絵画作品の意味内容と機能に関して検証した。第三章では、ヤン・ファン・エイクと工房作《ヤン・フォスの聖母子》(1441-43年頃、ニューヨーク、フリック・コレクション)に焦点を当て、制作背景、設置場所、観者の分析と、作品に付与された贖宥に関して検証した。第四章では、ブリュージュの救世主聖堂に保管されている挿絵付き贖宥状のコピーを事例に、贖宥の宣伝のために制作されたイメージとテキストの役割を分析した。第五章では、現在でも元来の設置場所に残されている稀有な作例として、ヤン・ヨーストに帰属される《聖母の七つの悲しみ三連画》(1505年、パレンシア大聖堂)に注目し、特定の信仰(聖母の七つの悲しみ信仰)を普及させるために制作された絵画作品と、イメージに授与された贖宥、そして観者がイメージの前で為すべき宗教的实践に関して分析した。

本書は2017年5月にヘント大学 Universiteit Gent に受理された博士論文に基づく。しかし、刊行に至るまでは多くの時間と労力を有した。ブック・プロポーザルを海外の複数の出版社に提出し、関心を寄せてくれたのがベルギーに拠点を持つ Brepols Publishers であった。美術史部門の担当者とは年に一、二回対面やメールなどでやり取りをしたが、中々具体的な回答を頂戴出来ない状態が数年続いた。現実化に向け進みだしたのは、2019年に鹿島美術財団より出版助成を得てからだだった。その後、アメリカ在住のエディターに校正を御願ひするが、大変手厳しく激しい(良い意味で)校正で、昼夜問わず改訂に明け暮れる日々が半年ほど続いた。最終的には4年がかりで出版することが出来、書籍を手にとった時はとても愛しく感じたものである。

周藤芳幸編 Yoshiyuki SUTO (ed.)
Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World.
 Wien: Phoibos Verlag.

本書は、2021年（実際には2022年の1月末）にオーストリアの学術出版社フォイボス・フェアラークから刊行された論文集である。何分にもさまざまな国（所属研究機関でカウントすると、日本7、イギリス3、ギリシア3、アメリカ2、オランダ1、オーストリア1、イスラエル1）の研究者が執筆した英語論文を編集して国外の出版社から刊行するのは初めての経験だったので、ここでは本書の内容ではなく、この企画の発端から現物が完成するまでの顛末を紹介しておきたい。

2018年の9月に、第4回日欧古代地中海世界コロキウムを、科研費基盤(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」の最終成果報告会として開催した。この研究集会は、実際には前年度申請をしていた科研費基盤(A)「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」が採択になったため、当初の計画（国際研究集会の開催費を見込んだ前科研の最終年度の経費）よりも少ない予算で行うことを余儀なくされたり、さらには初日に大型の台風が名古屋を通過したり（国外からの参加者たちは、休憩時間にカンファレンス・ホールの窓から物珍しそうに外の暴風雨に見とれていた）と、いろいろなハプニングに見舞われたものの、金山弥平教授や川本悠紀子准教授（当時はYLC特任助教を務めており、伊勢神宮へのエクスカッションでは英語で見事なバスガイドを務めていただいた）をはじめとする多くの同僚、研究仲間の支援もあって、無事に終了することができた。

さて、このコロキウムでは、当初そのプロシーディングスを *KODAI*（古代）という国内の欧文雑誌の特別号として刊行することを予定し、そのように参加者にも案内していた。しかし、終わってみると、これだけ著名な古代ギリシア史やローマ史の研究者が寄せてくれたペーパーを *KODAI* に掲載するのはもったいない（と言うと、長年この貴重な欧文学術雑誌の刊行に尽力されてきた先学には大変申し訳ないのであるが）気がしてならない。そのときふと思い出したのが、科研費のメンバーである筑波大学の長田年弘教授（古代ギリシア美術史）が、2016年に彼の率いるパルテノン・プロジェクト・ジャパンの報告書をウィーンのフォイボスから出版していたことだった。幸いにも、本書に寄稿している元ウィーン大学教授のマリオン・マイヤーさんのパートナーであるヨハネス・バウアー氏がこの出版社の営業部に勤めているという縁もあって、マリオンさんに打診してみたところ、この話はとんとん拍子に進んだ。こうして、コロキウムでの報告者には2019年の9月末を締め切りとして原稿を依頼し、2019年の8月には、出張先のアテネのとあるレストランのテラスで、ギリシアの爽やかな夜風に吹かれながらマリオンさんと出版に向けて祝杯をあげるにまで至った。つまり、ここまではいたって順調だったのである。

ここで話を先に進める前に、原稿を依頼する際にどのような点に留意したのかということにも触れておきたい。この日欧古代地中海世界コロキウムでは、桜井万里子先生（当時は東京大学教授）を日本側の代表として2005年にその第一回がロンドンで開催されたときから、ギリシア考古学者として著名なキャシー・モーガンさん（当時はロンドン大学教授、後に在アテネ・イギリス考古学研究所の所長を経て、現在はオックスフォード大学オール・ソウルズ・カレッジ教授）からいろいろアドバイスももらっていた。そのキャシーからまず忠告されたのが、原稿を依頼する際に、注と文献リストの体裁を前もってしっかり指示しておくように、ということだった。そこで、この頃ちょうどライデンのブリル社から出版される予定の論文集に寄稿する話に来ていたこともあって、あまり深く考えることなく、その手許にあったブリルの注と文献リストのサンプルを寄稿者に送って、これに従ってくれるように依頼したのであるが、後から思えば、これはあまり賢明ではなかった。というのも、このサンプルのフォーマットはヨーロッパ大陸型とでも言うのか、典型的なイギリスの大学出版会のスタイルともアメリカの大学出版会のそれとも異なっていた。そのため、寄稿時にこれに忠実に従ってくれたのはキャシーくらいのもので、多くの執筆者がそれぞれの方法で文献リストを

作ってきた結果、そのスタイルの統一に多大な時間を要することになったからである。なお、字数については文献リストを除き註込みで最大7500語と指定したが、これについては各執筆者が柔軟に解釈していたようである。

さて、2019年の夏に話を戻すと、締切の9月末までに三分の一くらいの執筆予定者からは一応の完成原稿が届いたものの、その後はリマインド・メールを送っても、なかなか原稿が集まらない状態が続き、やきもきしているうちに、年を越しても思いがけない事態が出来た。言うまでもない、コロナ禍の勃発である。日本では授業がオンラインになる程度で、本格的なロックダウンが行われなかったために実感が湧かなかったが、このときヨーロッパの多くの都市では大学のオフィスや研究所の図書室が完全に閉鎖されたばかりか、自宅から外出するのにもままならない状態が続いていた。当然のことながら、まだ原稿を出していなかった執筆者からは、史料や文献を確認できないので執筆作業がストップしている旨の連絡が相次ぎ、編集作業はほぼ一年近く停滞を余儀なくされることになった。一方で、早々に原稿を出してくれた研究者からは、刊行がいつになるのか知りたい、もし刊行の見込みが立たないのなら他のところに出すので論文を取り下げたい、といった頭の痛いメールが届くようになり、対応に苦慮する日々が続いた。振り返ってみると、この頃が精神的にはもっとも辛かったような気がする。ただ、徐々にコロナ禍が収束したこともあり、2021年7月の末に、ようやく18本の論文と新たに書き下ろしたイントロダクション、執筆者リストなどをフォイボスの編集担当者であるロマン・ヤコベク氏に送ることができた。

しかし、本当に大変だったのはここからである。というのも、ヤコベク氏からは校正用のpdfがあつという間に送られてきたものの、pdfへの校正の方法が国際的に(国内でも)共有されていないこともあって、執筆者との意思疎通はなかなかスムーズに進まなかった。もちろん、若手の研究者はpdfの直接編集機能を駆使して修正したものを速やかに送り返してくるのだが、年配の研究者になるほどこの方法には慣れていないのか、pdfをプリンアウトして手書きで修正点を指示した上でスキャンしたものを送り返すなどの方法で対応してきた執筆者も少なくなく、そうすると達筆のコメントを読解するのも一苦勞ということになる。さらに、これは日本語で編集する際も同様ではあるが、校正の段階で大きく修正を加えてくる大物の研究者もいらっしゃって、これにはヤコベク氏からも「校正は無理」という返事が来たため、数日かけてテキスト全文を(辞典なども確認しながら)自分で打ち直して再提出したこともあった。もっとも、これはこれで史料を改めて読み直す良い機会となったのだが、この頃は、毎朝メールを開いて校正が戻ってきたのを確認するたびに、溜息をついていたものである。もちろん、こちらから予めお願いしておいた通り、修正箇所についてはきちんとワードのファイルにまとめて指示してくださった方もいて、最初からもっとこの方法を徹底すべきだったと後悔している。

校正が進んで頁割りも確定してくると、次は索引の作成である。現在、日本語で著書を出版する際に索引作成で苦勞することはそれほどないが、この論文集の場合には、二つの理由からこの作業が難航した。一つは、同名異人などの識別である。たとえばシチリアの僭主であるヒエロンには、前5世紀に活躍したヒエロン1世と、前3世紀にシュラクーサイの僭主(王)となったヒエロン2世がおり、それぞれがギリシアの聖域に奉納を行っているが、初出箇所にはどちらであるかが明記されていても、二回目以降については文脈を確認しないとどちらかが分からないこともあった。また、アンティオコスという人名については、本書ではそのほぼすべてがセレウコス朝のアンティオコス4世のことだったが(意外なことに、「大王」と呼ばれたアンティオコス3世への言及は皆無だった)、一箇所だけがシュラクーサイの歴史家アンティオコスを指していた。また、ヘラクレイアという都市名の場合、結果として本書では4つの地理的に異なるヘラクレイアが言及されているため、これについても確認と識別が必要だった。

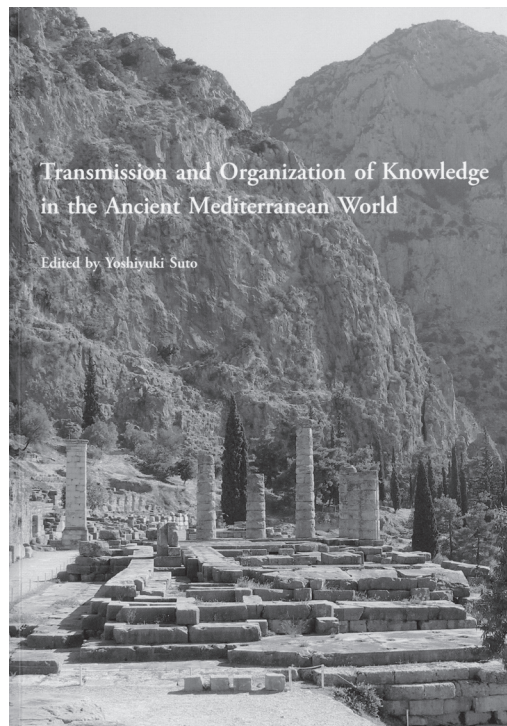
もう一つは、ギリシア語の固有名詞のラテン・アルファベットでの表記方法が研究者(あるいは母語)によってまちまちなことである(これは悪名の高い問題で、欧米で出版されている論文集でも、常にこの点が

エクスキューズされている)。一例をあげると、小アジアのエーゲ海岸の都市クニドスの場合、Cnidus、Cnidus、Knidosなどと表記されていても、これらは同じ都市のことなので、索引では一つにまとめる必要がある。また、とくに英語の場合、著名な人物については伝統的な英語表記を優先するとしても（たとえばフィリッポス2世であれば、Philip II）、そうでない人物（メッセニアの有名な彫刻家ダモフォンの父親であるフィリッポス）の場合は元の綴り（Philippos）を維持せざるを得ない。このような困難にもかかわらず、索引作成に果敢に取り組んでくれた元大学院生の竹尾美里さんと内山陽子さんには、ただただ感謝するばかりである。

唯一(?) 楽しかったのはカバーの装丁で、これには2015年の夏にデルフィを訪れた際に撮影したアポロン神殿の写真を使うことにした。早朝ということであたりにはまったく人影もなく、ゴツゴツとしたパルナッソス山の絶壁を背景に円柱が並ぶ神殿の遺構のたたずまいは、この地でアポロン神の神託という形で行われていた古代の知の伝達と組織化を偲ばせるものとして、本書を飾るにふさわしいものと自負しているところである。

なお、本書の完成間際に、寄稿者の一人であり、来日のたびに我が家にも遊びに来ていただいていたドラム大学名誉教授のP. J. ローズ先生が急逝されたとの報に接して、大きな衝撃を受けた。というのも、ローズ先生からは、お亡くなりになる一週間ほど前に校了の旨を告げるメールをいただいたばかりで、そこには、3回目のワクチン接種を受けたことなどが、いつものカジュアルな筆致で綴られていたからである。この場を借りて、ご冥福を心からお祈りしたい。

こうして、コロナ禍を挟んだとはいえ、結果として本書の完成までには足かけ4年の歳月を閲することになった。コロキアムの準備段階も含めれば、膨大な時間とエネルギー（そして心労）を要したが、これが我が国における西洋古代史研究の成果の国際的な発信の一助となれば本望である。



Ⅲ 各種データ

1. 教育の現況

1-1 教育プログラムの構成

資料1-1-1 人文学研究科の学位プログラム・コースと分野・専門 (2021年度)

学位プログラム	コース	分野・専門
言語文化系	文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学、日本語教育学、英語教育学、応用日本語学
	哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史文化系	歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
	総合文化学	映像学、日本文化学、文化動態学、ジェンダー学
英語高度専門職業人	英語高度専門職業人	
多文化共生系	国際・地域共生促進	

資料1-1-2 文学部のコースと分野・専門 (2021年度)

コース	分野・専門
文芸言語学	言語学、日本語学、日本文学、英語学、英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学
哲学倫理学	哲学、西洋古典学、中国哲学、インド哲学
歴史学・人類学	日本史学、東洋史学、西洋史学、美学美術史学、考古学、文化人類学
環境行動学	社会学、心理学、地理学
G30国際	アジアの中の日本文化

1-2 国際化

資料1-2-1 大学院生の海外研修 (オンライン含む) (2021年度)

学年(人数)	研修先の国名(機関名)	研修期間
D3 (4)	アメリカ (オレゴン大学)	9ヶ月
	イギリス (ウォリック大学)	10ヶ月
	韓国 (木浦大学)	1日
	中国 (同済大学)	半月
D2 (3)	イギリス (ウォリック大学)	9ヶ月半
	韓国 (木浦大学)	1日
	ドイツ (ベルリン自由大学)	1年7ヶ月
D1 (2)	アメリカ (ノースカロライナ州立大学)	2ヶ月半
	韓国 (木浦大学)	1日
M2 (2)	エストニア (タルトゥ大学)	10ヶ月半
	メキシコ (なし)	5ヶ月半
M1 (5)	アメリカ 2名 (ノースカロライナ州立大学)	2ヶ月半
	韓国 2名 (木浦大学)	1日
	中国 (同済大学)	半月

注：オンラインではないものは太字で示されている。
協定校は下線で示されている。

資料1-2-2 学部生の海外研修（オンライン含む）（2021年度）

学年（人数）	研修先の国名（機関名）	研修期間
学部4年（5）	アメリカ（ノースカロライナ州立大学）・（セントオラフ大学） カナダ（ヴァンウエストカレッジ） スペイン（なし） ドイツ（フライブルク大学）	2ヶ月半・9ヶ月 8ヶ月半 1年 11ヶ月
学部3年（3）	アメリカ2名（ノースカロライナ州立大学） オーストラリア2名（モナシュカレッジ） フィリピン（グリーンインターナショナルテクニカルカレッジ） フィンランド（ヘルシンキ大学）	2ヶ月半 半月 半月 10ヶ月
学部2年（6）	アメリカ（ノースカロライナ州立大学） 韓国（木浦大学）	2ヶ月半 1日
学部1年（11）	アメリカ（ノースカロライナ州立大学） カナダ（プリティッシュコロンビア大学） オーストラリア3名（モナシュカレッジ） 中国（同済大学） フィリピン（グリーンインターナショナルテクニカルカレッジ）	2ヶ月半 5日間 半月 半月 半月

注：オンラインではないものは太字で示されている。
協定校は下線で示されている。

1-3 FD

資料1-3-1 ファカルティ・ディベロップメント（FD）開催実績一覧（2021年度）

取組	主催	実施内容・方法	参加者数	日時	講演者
FD 講演会	学生支援本部	コロナ禍の名大生における心の健康・Teams	93	7/21	鈴木健一教授
FD 講演会	学生支援本部	秋学期心の健康について緊急現状報告と学生状況把握のお願い・Teams	90	11/17	松本寿弥講師
FD 講演会	研究企画課	研究費等の適正な使用について・Teams	93	12/22	中東正文副総長

1-4 大学院生・若手研究者等の支援

資料1-4-1 大学院生支援事業実施状況（2021年度）

事業名	前期課程 (件数)		後期課程 (件数)			計	助成決定額 (千円)
	国内	国外	国内	国外	オンライン		
研究発表支援事業			0	0	0	0	0
フィールド調査プロジェクト	2	2	2	0		6	814
計	2	2	2	0	0	6	814

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

資料1-4-2 各種研究員等受入状況

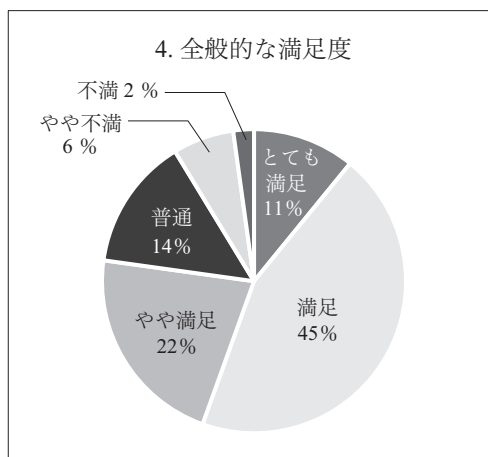
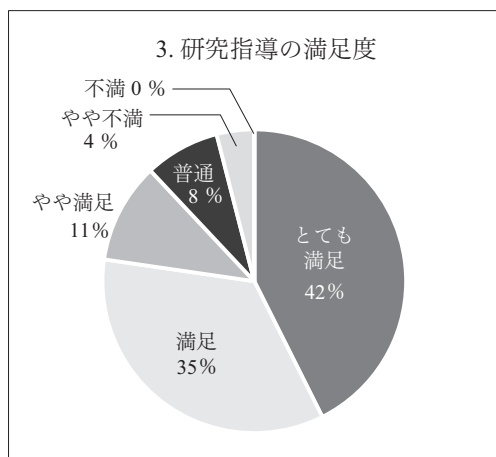
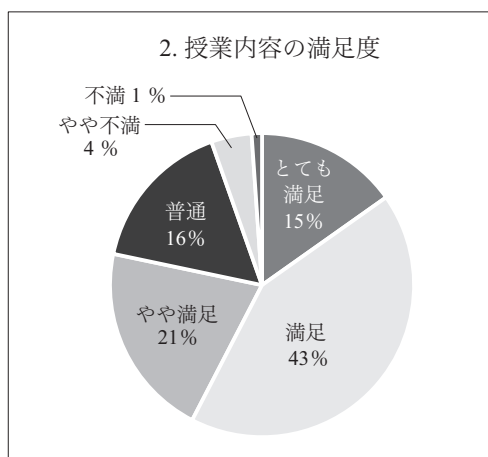
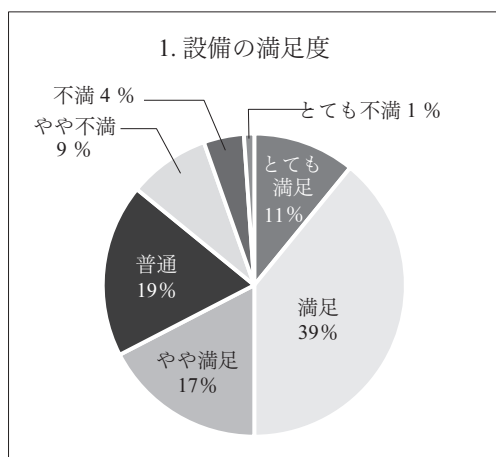
	博士研究員	博士候補 研究員	CHT 共同研究員	TCS (JACRC 含む) 共同研究員	YLC 助教	客員研究員
2017年度	17	25	5	0	3	9
2018年度	16	20	8	0	5	18
2019年度	16	23	10	1	5	17
2020年度	17	21	8	0	0	6
2021年度	15	25	8	2	3	7

注：CHT＝人類文化遺産テキスト学研究センター
 TCS＝超域文化社会センター（2018年度～）
 JACRC＝「アジアの中の日本文化」研究センター（～2017年度）
 出典：文系総務課記録

1-5 教育の成果

資料1-5-1 教育環境の満足度調査（2021年度）

- ・教育環境の満足度調査の項目
1. 教室や図書室などの施設設備の満足度を教えてください。
 2. シラバスや受講している授業の内容についての満足度を教えてください。
 3. 所属する分野・専門の教員からの研究指導などについての満足度を教えてください。
 4. 全般的にみた、本学部・研究科の教育および学習環境についての満足度を教えてください。



出典：文系教務課記録

資料1-5-2 大学院生等の研究業績件数

	論文発表		学会発表		受賞	研究助成
	査読有	査読無	国際	国内		
2017年度	7		52		0	
2018年度	46		144		1	
2019年度	74	27	43	83	1*	4**
2020年度	76	22	39	72	4***	1****
2021年度	調査中				5*****	3*****

- * D2 日本語／日本語教育研究会第11回研究大会ポスター賞
- ** D3 公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成
- ** D2 ロータリー米山記念奨学金
- ** D2 東海ジェンダー研究所研究助成
- ** D1 公益財団法人松下幸之助記念志財団研究助成
- *** D3 朝鮮大学人文学研究院・518記念財団優秀論文賞
- *** D3 日本英語学会大会優秀発表賞
- *** D3 2020年日語教育与日本学研究国際会議研究生学述論壇優秀論文評選
- *** D1 第16回日本近世文学会賞
- **** 研究員 公益財団法人鍋島効公会研究助成
- **** 研究員 日本中国学会賞
- **** D 「伊勢の御師フォーラム2021」懸賞論文最優秀賞
- **** M TMI QE1 優秀賞
- **** D3 第12回中日対照言語学会シンポジウム大学院生フォーラム優秀賞
- **** M 全国学生英語プレゼンテーションコンテストトップ50入賞
- ***** M TMI 卓越大学院プログラム履修生
- ***** 研究員 笹川科学研究助成
- ***** D2 日本学術振興会特別研究員 DC2

1-6 進路

資料1-6-1 就職活動セミナー開催実績一覧 (2021年度)

開催日	名称	講師
2021年11月24日	家庭裁判所調査官業務説明会	名古屋家庭裁判所職員
2021年11月24日	文学部・人文学研究科 就職セミナー 2021	渡部亮 (株式会社マイナビ) 船津静代 (学生相談総合センター 就職相談部門)
2021年12月17日	文学部・人文学研究科 教職セミナー2021	鶴田淳 (愛知県立刈谷高等学校) 濱田純可 (愛知県立豊田西高校)

出典：進路・就職対策委員会資料

1-7 高大連携

資料1-7-1 教員による高校訪問、高校による大学訪問、出張講義等実施実績一覧

2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		2021年度	
5月24日	愛知県立安城南高校	5月24日	岐阜県立斐太高校	5月15日	私立麗澤瑞浪高校	10月1日	私立愛知淑徳高校	6月3日	私立愛知淑徳高校
5月25日	岐阜県立斐太高校	5月30日	私立麗澤瑞浪高校	5月23日	岐阜県立斐太高校	11月9日	愛知県立江南高校	6月29.30日	私立福井南高等学校
6月5日	浜松市立浜松高校	6月4日	浜松市立浜松高校	6月10日	浜松市立浜松高校	11月12日	名古屋市立菊里高校	7月第1週	名古屋大学教育学部附属高校
6月7日	岐阜県私立高校保護者会	6月7日	私立愛知淑徳高校	7月9日	愛知県立明和高校	12月21日	愛知県立明和高校	10月15日	愛知県立半田高校
6月15日	私立高田高校	6月27日	愛知県立常滑高校	7月27日	私立聖隷クリストファー高校	3月12日	福井県立藤島高校	10月21日	愛知県立荻谷北高校
6月21日	私立麗澤瑞浪高校	6月29日	愛知県立大府東高校	8月6日	愛知県立知立東高校			10月25日	愛知県立岡崎高校
6月29日	静岡県立掛川西高校	7月6日	私立愛知高校	9月3日	愛知県立荻谷北高校			10月27日	愛知県立豊橋東高校
7月10日	愛知県立横須賀高校	7月9日	愛知県立明和高校	9月17日	岐阜県立多治見北高校			10月28日	愛知県立西尾高校
7月10日	愛知県立明和高校	7月10日	愛知県立知立東高校	9月20日	岐阜県立岐阜北高校			11月8日	愛知県立江南高校
7月11日	岐阜県立多治見北高校	7月19日	私立名古屋高校	9月27日	愛知県立松蔭高校			11月10日	愛知県立豊田北高校
7月12日	愛知県立知立東高校	7月31日	名古屋市立名古屋西高校	10月16日	愛知県立半田高校			11月11日	名古屋市立菊里高校
8月11日	愛知県立明和高校	9月27日	愛知県立松蔭高校	10月18日	私立愛知高校			11月16日	岐阜県立岐阜北高校
9月11日	岐阜県立岐阜北高校	10月12日	愛知県立時習館高校	10月21日	愛知県立岡崎北高校			11月16日	岐阜県立多治見北高校
9月13日	愛知県立松蔭高校	10月15日	愛知県立江南高校	10月28日	愛知県立江南高校			11月18日	愛知県立豊田西高校
9月30日	三重県立四日市高校	10月22日	愛知県立岡崎北高校	10月29日	私立南山高校・中学男子部			12月20日	愛知県立明和高校
10月3日	私立南山高校・中学男子部	10月23日	私立南山高校・中学男子部	10月31日	愛知県立西尾高校				
10月5日	名古屋大学教育学部附属高校	10月24日	愛知県立豊田北高校	11月7日	愛知県立豊田西高校				
10月16日	愛知県立江南高校	11月1日	名古屋市立菊里高校	11月12日	岐阜県立多治見北高校				
10月16日	愛知県立岡崎北高校	11月8日	愛知県立豊田西高校	11月13日	愛知県立豊田北高校				
10月19日	愛知県立半田高校	11月9日	愛知県立半田高校	11月22日	愛知県立半田東高校				
10月23日	愛知県立大府東高校	11月15日	愛知県立西尾高校	1月21日	名古屋市立菊里高校				
10月25日	愛知県立豊田北高校	12月6日	名古屋市立名古屋西高校						
11月2日	愛知県立豊田西高校	1月11日	私立土佐塾中学・高校						

2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		2021年度	
		11月 9日	名古屋 市立 菊里 高校	3月 12日	福井 県立 藤島 高校				
		11月 10日	愛知 県立 半田 高校						
		11月 15日	愛知 県立 西尾 高校						
		3月 13日	福井 県立 藤島 高校						

出典：文系教務課記録・広報体制委員会議事録

2. 研究の現況

2-1 研究の成果

資料2-1-1 教員の研究活動状況

	著書数		招待論文数		査読付き論文数		その他
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語	
2017年度	39 (7)	5 (2)	31	1	33	16	226
2018年度	23 (7)	9 (0)	33	9	14	32	302
2019年度	28 (6)	12 (3)	36	14	29	21	275
2020年度	40 (8)	13 (0)	33	3	19	29	203
2021年度	53 (3)	7 (1)	0	0	38	35	69

注：著書数については、内数（カッコ内）として「単著」の数を記載。
 学会発表や「査読付き論文」に当たらない論文などについては、「その他」としてカウント。
 「招待」かつ「査読付き」の場合は、「招待」でカウント。
 カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

資料2-1-2 国際／国内研究集会開催件数

	国際研究集会	国内研究集会
2017年度	14	13
2018年度	19	17
2019年度	16	16
2020年度	12	29
2021年度	46	44

資料2-1-3 共同研究実施件数（教員延べ件数）

経費	授業料	科学研究費 補助金	名古屋大学 全学諸経費	文学研究科 プロジェクト経費	その他
2017年度	3	30	0	2	20
2018年度	2	39	0	4	31
2019年度	6	57	10	6	46
2020年度	2	37	0	1	17
2021年度	11	65	5	6	25

資料2-1-4 海外における調査・フィールドワーク件数

実施国	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
アメリカ	1	6	3	1 (1)	
イギリス	1	1	5	4 (4)	
イタリア	1	1	1		
インド	1				
インドネシア	1	1			
ウズベキスタン	1				
エジプト	1	1	1		
エチオピア				1 (1)	1
エルサルバドル	1	2	2		
オーストリア		1			1
カメルーン				3 (3)	
韓国		4	2		
ギリシャ	2		1		
キルギス			1		
グアテマラ	1	1	1		
クロアチア	1				
スイス		1			
スペイン		1	1	1 (1)	
タイ		1			
台湾	2	5	4		
タジキスタン	1				
中国	3	7	5		6 (6)
ドイツ		2	2		
トルコ			1		
ニカラグア		1			
ノルウェー			1		
フィリピン	1	1	1		1 (1)
フランス	2	2	6	2 (2)	1 (1)
ホンジュラス		1			
メキシコ	1		1		1 (1)
ラオス	1		1		
リトアニア	1				
ロシア	1	1	1		
不明				1 (1)	

注：()内はオンラインの内数

資料2-1-5 研究会実施回数

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
奥田靖雄翻訳プロジェクト研究会	10	8	1	6	12
中国ジェンダー研究会	3				
フーコー研究：人文科学の再批判と新展開	5	10	6		
イマージュ論研究会	1		3		
名古屋大学会話分析データセッション	11	9	12	5	10
日本アメリカ史学会	1				
名古屋大学英語学談話会	10	10	10		
「身体と記憶の共鳴」研究会 (2019年度より「予測を生み出す推論装置」研究会へ名称変更)	2	3		1	
The S.E.P.C (The Seminar on English Poetry and Criticism)	1				
名古屋平安文学研究会	2	2	2	1	
リーディング・語彙研究会	12	12		12	
日本語教育研究集会	1	1	1		
「日本言語文化研究」学術研究会	1	1		1	
上海師範大学・名古屋大学言語文化学術交流会	1	1		1	
フローベール研究会	1				
名古屋音声研究会	13	13	10	3	2
ブルースト研究報告会	2				
名古屋言語研究会	11	11	5	5	5
名古屋大学国語国文学会	2	2	2	1	1
Nagoya Iconicity in Language and Literature Society (NILLS)	10	10	1		
相互行為のポインティング研究会	2				
名古屋大学アメリカ文学・文化研究会	1	1	1	1	
「地域と宗教」研究会		3			
フェミニズム・ジェンダー読書会		6	7	3	4
1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ		2	3	1	
1930年代における東アジア女性雑誌の比較研究		1	3	2	
古代アメリカ学会西日本部会		2			
考古学研究会東海例会		1			
ドイツ社会国家研究会		4			
テキストの中の文法研究会		2			2
アコリス考古学プロジェクト		1		1	
賢愚経研究会		9	6		
スイス科研研究会 (2020年度より「アルプス科研研究会」へ名称変更)		5		1	
先導的人文学研究		6	3		
言語の類型的特点をとらえるための対照研究会		3			
歴史教育研究会		1	1		
東海縄文研究会		1			
東アジアと同時代日本語文学フォーラム		1	1	1	1
古書の会			11		
象徴天皇制研究会			4	3	
名古屋大学西洋古典研究会			1		
仏教教学研究会			5		
日中文献交流史研究会			6		

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
比較人文学研究会			15		
中世史研究会			10	10	
中国語文献を読む会			1	2	3
中国社会研究会			6	8	
日本フランス語フランス文学会中部支部大会			1	1	1
ボルヘス原書読書会			30		
「訳官使・通信使とその周辺」研究会			3		
六度集経研究会			3		
「言説と情動」研究会			5		3
「予測を生み出す推論」研究会			3		4
名古屋大学東洋史研究会大会			1		
「地域と宗教」研究会			2		
名古屋哲学フォーラム			1		
中部人類学談話会			5		
電算文学研究会				1	12
オンライン映画上映と監督との対話シリーズ				4	
Global Hardy				1	1
日本ハーディ協会				1	1
ダンス・スコール特別講座シンポジウム				1	1
多様な観点からの日本映画				1	
ベルギー・ナミュール大学教授 Jean-François Nieuw 講演会				1	
西洋古代史インターユニ				1	
エジプト領域部研究の新展開				1	
日本オリエント学会				1	
日本ナイル・エチオピア学会				1	
日本言語学会				1	2
考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流：古代日本と中央アジア				1	
超域文化社会センター 国際シンポジウム				1	1
Japanese and Korean Linguistics Conference				2	1
「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」研究会				2	
グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究会				2	
International Workshop on Mimetics IV				1	
「コンピュータを使った近現代文学研究」勉強会				3	
フランス・アカデミーの総合的研究				3	
上海財形大学・名古屋大学共同研究会				1	
Zora Neale Hurston, “The Swear”				1	
国立民族学博物館共同研究					7
東アジア日本研究者協議会 (パネル数)					2
Logic and Engineering of Natural Language Semantics					1
伊保谷から見た豊田市の古代					1
Gender, economy and mobilities in the Upper Mekong region					1
メコン川上流地域における宗教・経済・ジェンダー					2
中世社会と書状—文書実践の日欧比較—					1
西洋古代におけるジェンダー					9

学会・研究会の名称	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
日韓学術交流会					1
西洋古代史インターユニヴァーシティ・ワークショップ					1
上海財経大学・名古屋大学共同研究会					1
東アジア日本語学国際シンポジウム					1
名古屋大学英文学会					1
中华学术外译项目《古汉语通论》日译研讨会					1
中华学术外译项目《古汉语通论》申报汇报会					1
玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本					1
学僧慈円学会					1
バーミヤン・フォーラム—二大仏の破壊前と現在：課題と展望—					1
西域・中国からの水脈—仏典と翻刻・俗講					1
「テキストマイニング」研究会					2
「シン・人文学」研究会					3
先導的人社研					1
会話分析研究会					1
ミシェル・フーコー「コレージュ・ド・フランス講義」を読む、公開書評会					1
名古屋大学人文学研究科言語学分野公開講演会					1
歴史語用論・歴史社会言語学研究会					1
名古屋歴史科学研究会					1
名古屋大学最先端国際研究ユニット中間成果報告会					1
日本認知言語学会チュートリアル					1
The International Cultural Seminar by the Japanese Society for German Studies					1
国際オンライン講演会（名古屋／トゥーロン）					1
中唐文学会大会「唐代仏教靈驗譚の研究」					1
International Conference of the European association for Japanese Studies, “Migration and Sustainable Society: the limits and opportunities of cultural diversity in Japan”					1
日本に住む脱北した元「帰国者」の記憶・夢・声—アートプロジェクト『朝露』					1
『NO NUKES—〈ポスト3.11〉映画の力、アートの力』刊行記念講演					1
植物遺伝学とテキスト理論の関連について					1
Colloque international à l’occasion du 40e anniversaire de la Société franco-japonaise d’art et d’archéologie					1
新約聖書画像研究会					1
北東アジア研究会「近代家族論の射程と中国における社会主義的近代化—『中国の家族とジェンダー』とその後」					1
日仏社会学会大会					1
上野千鶴子氏講演会＋座談会「30年目の『家父長制と資本制』：中国・日本女性における今日的な意義」					1

出典：人文学研究科教育研究推進室資料

2-2 研究資金の状況

資料2-2-1 科学研究費等受入状況

		新規採択	継続採択	合計	
2017年度	件数	14件 (うち基盤S:0件 基盤A:0件)	70件 (うち基盤S:1件 基盤A:1件)	84件 (うち基盤S:1件 基盤A:1件)	
	受入金額	直接経費	18,500,000円	114,923,156円	133,423,156円
		間接経費	6,060,000円	28,950,000円	35,010,000円
		合計	24,560,000円	143,873,156円	168,433,156円
2018年度	件数	18件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)	55件 (うち基盤S:1件 基盤A:0件)	73件 (うち基盤S:1件 基盤A:2件)	
	受入金額	直接経費	31,300,000円	80,600,000円	111,900,000円
		間接経費	9,390,000円	24,180,000円	33,570,000円
		合計	40,690,000円	104,780,000円	145,470,000円
2019年度	件数	23件 (うち基盤S:0件 基盤A:0件)	48件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)	71件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)	
	受入金額	直接経費	37,500,000円	53,800,000円	91,300,000円
		間接経費	11,250,000円	16,140,000円	27,390,000円
		合計	48,750,000円	69,940,000円	118,690,000円
2020年度	件数	18件 (うち基盤S:0件 基盤A:1件)	57件 (うち基盤S:0件 基盤A:2件)	75件 (うち基盤S:0件 基盤A:3件)	
	受入金額	直接経費	28,200,000円	67,831,555円	96,031,555円
		間接経費	8,460,000円	19,296,000円	27,756,000円
		合計	36,660,000円	87,127,555円	123,787,555円
2021年度	件数	19件 (うち基盤S:0件 基盤A:0件)	44件 (うち基盤S:0件 基盤A:3件)	63件 (うち基盤S:0件 基盤A:3件)	
	受入金額	直接経費	21,000,000円	72,142,160円	93,142,160円
		間接経費	5,400,000円	21,351,000円	26,751,000円
		合計	26,400,000円	93,493,160円	119,893,160円

出典：研究事業課記録

資料2-2-2 寄付金等受入状況（2021年度）

種別	課題名	出所	代表者	受入金額
寄付金		公益財団法人大幸財団	大島 絵莉香	550,000円
寄付金		公益財団法人大幸財団	樋口 諒	950,000円
寄付金		公益財団法人ヒロセ国際奨学財団	黄 潔	1,724,476円
寄付金		公益財団法人 JFE21世紀財団	SAVELIEV IGOR	1,500,000円
寄付金		公益財団法人 豊秋奨学会	土屋 洋	800,000円
寄付金		公益財団法人たばこ総合研究センター	黄 潔	800,000円
受託事業	研究拠点形成事業 (A. 先端拠点形成型)	独立行政法人日本学術振興会	阿部 泰郎	14,355,000円
受託事業	二国間交流事業共同研究・セミナー	独立行政法人日本学術振興会	加藤 久美子	170,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 世界で活躍できる研究者戦略育成事業 (スタートアップ)	文部科学省 (学内配分)	樋口 諒	500,000円
補助金	科学技術人材育成費補助金 科学技術イノベーション創出に向けた 大学フェローシップ創設事業	文部科学省 (学内配分)	徐 韻文 外7件	1,750,000円
補助金	次世代研究者挑戦的研究プログラム助 成事業	国立研究開発法人科学技術振興機構 (学内配分)	余 飛洋 外17件	4,500,000円

注：学内採択（補助金、寄附金）のうち、100万円未満のものについては計上していない

出典：研究事業課記録

資料2-2-3 人文学研究科教育実施経費配分状況（2021年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
美術史実習 1a/2a および美術史実習 1b/2b	美学美術史学	98,400円
日本史博物館実習 I	日本史学	29,000円
文化資源学研究 I	基礎基盤科目	29,000円
文化資源学研究 III	基礎基盤科目	58,000円
日本文化フィールドワーク実習 a	文化人類学	102,840円
日本文化フィールドワーク実習 b (学部) アーカイヴス・テキスト学フィールドワーク実習 (大学院 MC)	文化人類学	99,120円
宗教人類学基礎演習 a (大学院 MC) 文化人類学フィールド実習 I a (学部)	文化人類学	246,400円
宗教人類学基礎演習 a (大学院 MC) 文化人類学フィールド実習 I b (学部)	文化人類学	529,092円
文化人類学フィールド入門実習 I (学部)	文化人類学	51,500円
考古博物館実習 1a・1b・2a・2b・文化資源学 I	考古学	493,000円

出典：文系総務課記録

資料2-2-4 人文学研究科プロジェクト経費配分状況（2021年度）

プロジェクト名	代表者	配分額
ジェンダー／フェミニズム研究教育成果発信のための招待講演及び座談会	星野 幸代	213,000円
若手言語研究者育成のためのオンライン講義・チュートリアル実施プロジェクト	堀江 薫	180,000円
日中學術交流推進プロジェクト	鷲見 幸美	440,000円
「宗教遺産学の創成」プロジェクト—国際フォーラムの開催に向けて	影山 悦子	450,000円

出典：文系総務課記録

2-3 研究成果の社会還元

資料2-3-1 社会還元活動実施状況

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	78	73	90	57	75
新聞記事の掲載・テレビ出演等	21	41	104	48	24
高等学校への出張授業等	27	24	21	5	16
その他	4	15	18	20	0

注：カウントの基準の変更によって、例年と数値が異なる場合がある。

資料2-3-2 地域連携活動一覧

	種 別	内 容	成果物
2017年度	自治体史等	愛知県史、新修豊田市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編2中世1、『愛知県史』通史編3中世2・織豊
	文化財調査事業等	文化庁、愛知県、名古屋市（2件）、豊田市、一宮市、稲沢市、刈谷市、東栄町	
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、国立西洋美術館、名古屋市博物館、岡崎市美術博物館、稲沢市荻須記念美術館、西尾市岩瀬文庫	展示図録『こんな本があった！一岩瀬文庫平成皆調査中間報告展15一』／西尾市岩瀬文庫
2018年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史	『愛知県史』通史編5近世1、鳥取県史ブックレット
	文化財調査事業等	奈良文化財研究所、名古屋市、豊田市（2件）、稲沢市、刈谷市	
	博物館美術館等	国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館、岡崎市、稲沢市美術館	
2019年度	自治体史等	愛知県史、鳥取県史、豊田市史、知立市史、西尾市史、小松市史、鳥取市史	
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、稲沢市、刈谷市、豊川市、大垣市、設楽町、東栄町、豊根村	
	博物館美術館等	東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、三重県立美術館、名古屋市博物館（2件）、岡崎市美術博物館、稲沢市荻須記念美術館、一宮市博物館、西尾市岩瀬文庫	
	その他団体	北設楽花祭保存会、公益財団法人東海ジェンダー研究所、国立女性教育会館、特定非営利活動法人難民支援室	
2020年度	自治体史等	愛知県史、知立市史、西尾市史（4件）、豊田市史、新修豊田市史（2件）、小松市史、新修鳥取市史、明石市史	
	文化財調査事業等	愛知県、名古屋市、岡崎市（2件）、稲沢市（2件）、豊田市、豊川市（2件）、一宮市、あま市、岐阜県垂井町・白川町・大垣市（2件）、福島県只見町・金山町、長野県阿智村・飯田市	
	博物館美術館等	名古屋市博物館（2件）、特別史跡名古屋城、愛知県埋蔵文化センター、西尾市岩瀬文庫、国立歴史民俗博物館（2件）、静岡県立美術館、三重県立美術館、大学共同利用機関法人国文学研究資料館、花祭会館、ハーバード美術館	西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍のデータベース
	その他団体	名古屋テレビ、大須観音真福寺、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、中部日本ミツパチの会、一般財団法人日ロ友好愛知の会、サントリー文化財団、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所	『高校国語教科書』、『新修豊田市史』通史編5近代
2021年度	自治体（自治体史・文化財調査事業等）	名古屋市、豊田市（3件）、一宮市、犬山市、知立市、西尾市（3件）、豊川市、岐阜県、大垣市、石川県、小松市、鳥取市、明石市、福島県只見町・金山町	
	博物館美術館等	名古屋市博物館、大須観音真福寺宝生院文庫、愛知県公文書館、愛知県埋蔵文化センター、愛知芸術文化センター、岩瀬文庫、豊田市美術館、史跡大曲輪貝塚、稲沢市荻須記念美術館、国立歴史民俗博物館、静岡県立美術館、三重県立美術館、平洲記念館、ハーバード美術館（アメリカ）	
	その他団体	名古屋テレビ、大須商工会議所、特定非営利活動法人名古屋難民支援室、日ロ交流愛知の会、国立女性教育会館、公益財団法人東海ジェンダー研究所、東京都港区立男女平等参画センター、文化遺産国際協力コンソーシアム（3件）、長野県白馬村観光局、大学入試センター、日本学術振興会（3件）	

編集委員

川 本 悠紀子

McGEE Dylan

三 輪 晃 司

宮 地 朝 子

佐 野 誠 子

周 藤 芳 幸
(人文学研究科長)

宇 都 木 昭

吉 田 早悠里

(アルファベット順)

年報2021 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

2023年3月20日発行

発行 名古屋大学大学院人文学研究科教育研究推進室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL (052)747-6391

組版 株式会社あるむ

〒460-0012 名古屋市中区千代田3-1-12
TEL (052)332-0861
